

一歩

社会福祉法人 アルカディア

令和3年3月発行 第30号

第6こむぎハウス新築移転

～日頃、個人的に考えていること～①

第6こむぎハウス

社会福祉法人アルカディア、アルカディアグループホーム事業所の管理者を昨年9月からさせて頂いています、井汲真吾と申します。

この度、令和3年4月から、当法人の運営するグループホームの1ヵ所である、第6こむぎハウスが新築移転致します。



キッチン



大家さんのご理解や地域住民の方々のご協力のもと、グループホームに入居されている皆さんが安心して過ごすことが出来ている現状への感謝や、同時に、移転について快いお返事をして頂いた利用者の方への大きな感謝の気持ちも感じております。今後新たなグループホームで生活を送っていく利用者様方への支援を提供させて頂きつつ、実践や検証を繰り返し、『生活のしづらさの減少』や『生活のしやすさの増幅』を追求していこうと考えています。

私個人の意見とはなってしまいますが、異動をしてからというもの、通勤時や退勤時に絶えず考えていることがあり、それは『現在グループホームに住まわれている方々は、心の底からグループホームでの生活を希望されているのかどうか』ということです。障がいの有無による、『生活上の選択肢の狭小化』の事実は、残念ながら現実存在しています。その背景から、グループホームでの生活という選択肢を選ばざるを得なかった方々も少なくはなく、グループホームでの生活で時間が経過するとともに、『私はグループホームで生活するものだといった認識に変わってきてしまうのではないか』ということに大きな疑念を抱いています。（次のページに続く）

第6こむぎハウス新築移転

～日頃、個人的に考えていること～②

当法人としては現状で10か所のグループホームを運営しておりますが、老朽化しているグループホームも数カ所存在し、同時に利用者様方の高齢化も進んでおります。現在の平均年齢は約56歳となっており、中には70代後半の方もいらっしゃいます。

『老朽化』と『高齢化』といった二つの課題に直面している現状もある中で、前述した『グループホームでの生活の選択肢があるようでない』といった想いに加え、老朽化・高齢化への対応といった点で大きな懸念を抱えています。

これは一人の支援者としての意見であり、運営や管理の視点でと考えた際には相反する意見も併せて私の中には存在しています。

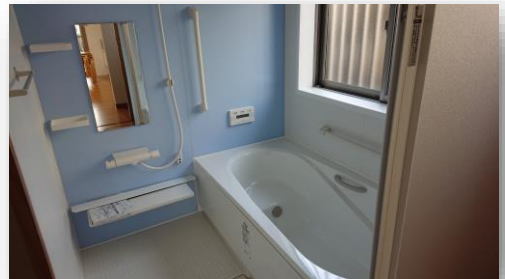
居室



テラス



お風呂

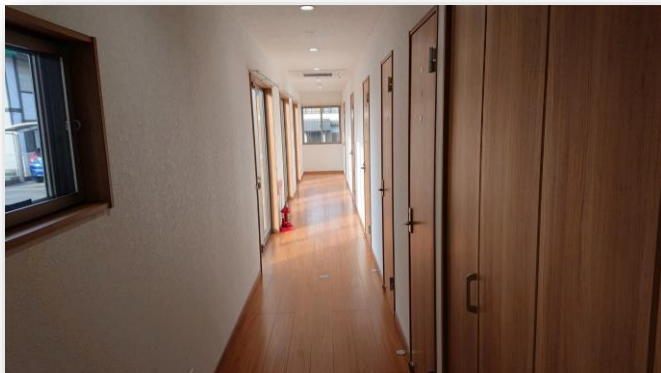


一人悶々と考える中で、よくたどり着く所としては、『いかに目の前の利用者が抱かされている“今の希望”を充足するための方法を提案し続けられるかどうか』といった事かと思えます。

支援者目線で、目の前の利用者の今後について考え、課題の発掘や、打開策の検討などの展望をもつことも重要ですが、引っ張るでもなく、下がるでもなく、基本的にはギアはニュートラルにしておくことで、目の前に存在する利用者の《今》を尊重出来るのではないかと考え、一日一日の関わりや縁を大切にしていきたいと思えます。

新築移転のご紹介と、個人的に考えていることを述べさせていただきました。ご一読いただけましたら幸いです。今後ともよろしくお願いたします。

廊下



アルカディアグループホーム事業所 管理者
井汲真吾

忘れられない<あのとき、あの風景> ～東日本大震災、10年を経て～

●あの瞬間

2011年、3月11日午後3時頃、法人内会議の途中だった。最初にグラグラとゆれた。揺れは更に増した。ただごとではない。幸い数分後、揺れは収まり、ほっと一息ついた。利用者、建物に被害はなかった。

その後、TVで福島、宮城、岩手などの被災地の映像が映し出されるのを見て啞然とした。津波で押しつぶされる家屋、濁流で流される車、夜半になっても燃える炎…。今まで見たことのない光景だった。死者、行方不明者約2万2千人。

あれから、もう10年の歳月が経った。現在の<コロナ禍>といい、この10年間で二度も未曾有の国難を経験した。<いつ、なにが どこ>で起こっても不思議ではないことを思いしらされた瞬間であった。

福島県の仮設住宅



●Aさんとの出会い

震災から一年余が経ったある日、Aさんの知人から電話をもらった。「震災で病院から避難した人の退院先を探している」と。アルカディアの職員数名で茨城県のB病院を訪れた。すんなりと話が進み、グループホームを利用することになった。

Aさんは福島県O町のC病院に入院中、震災に遭い避難。その後、2～3カ所を転々。震災のショックや長きにわたる入院生活を感じさせない口調で「退院したい、人生をやり直したい」と。力強さがズシリと伝わってきた。約1カ月後には太田の地を踏んだ。後に知ることになるが、福島から宮城にかけての海岸線に精神科病院が並んでいる。原発、精神科病院が人の少ない海岸に位置していることは、何を物語るのだろうか。

気仙沼の海岸線



●数度の訪問でみた風景

○街の風景

震災から数カ月後の夏、福島を訪れた。寝泊まりしたビジネスホテルの隣接する常磐線の原町駅。震災で自動車も人の姿もない。駅に立つと、まっすぐにのびた線路には背丈ほどの草が一面を覆っていた。駅前の広場にも人の行きかう姿はまばら。震災前には通勤、通学でにぎわっていただろうに…。普段の暮らしが一瞬にして奪われてしまった。

○海岸通りの風景

二度目の訪問。宮城。気仙沼の海岸通り。雑然と山積みされたゴミの山、何もない土地に一隻の船が巨大なプラモデルのように置かれていた。案内してくれた地元の行政職員が、「あの船を背景に写真を撮りましょうか」といつてくれたが、とてもそうした心境にはなれなかった。仙台を流れる広瀬川が逆流し、氾濫したという話にも、ただ聞き入るばかり…。自然の脅威に驚かされるだけ…。

○仮設住宅の風景

仮設住宅に住む人への<心のケア>と、訪れた。5～6人が集まっている場に「ちょっと話を聞かせてくれませんか?」と歩み寄る。とたんに会話が途切れた。「思い出したくない」と言う。まったくそのとおりだ。<心のケア>? 嘘っぽい気がして立ち去った。

これらの風景は今なお記憶の中に鮮明に残っている。

●思うこと～何を教訓とするのか～

教訓とすることは多々あるが、紙面の都合上、少ししか触れることができない。

○<ふるさと>を失うこと

福島第1原発事故により、周辺地区は立ち入り禁止となった。<危険だから近寄らない方がいい>と。この地で長い間、暮らしてきた人たちにとって<ふるさと>は失われた(奪われた)。

かつてグループホームにいたUさんのことを思い出す。口を開くたびに<家に帰りたい>と。実家はダムの下に沈み、町民住宅であったが、空き家になっていた。兄弟、行政皆が反対した。結局、本人の希望どおり実家に帰ることになった。

<ふるさと>を失うこと、言い換えれば、<ふるさと>に帰ることは、そこで生まれ育った人にとって何より<かけがいのない>場所なのだろう。

○原発について

原発についてあれこれ触れることは避けたい。ただ、一言だけ…。原発は日本の<高度成長経済>の幕開けとともに全国各地につくられた。<安全だ>と言われ続けてきた。だが<安全神話>はこの震災「事故」で崩れたことを。

○風評被害

<東北の魚、野菜は食べられない>。このような<風評>が広がった。福島から各地へ移り住んだ人々を敬遠することもあった。些細なことだが、被害者に配布された補助金でパチンコやカラオケ店に行っていることに対してネット上で<非難の声>が飛び交ったこともあった。なんという心ない声なのか! 先が見えない毎日を送る人たちが、現実をいつときでも忘れようとカラオケで思いっきり歌うことが非難されるようなことなのか。

●未来のために

このことについては、又、機会があれば触れたい。一言だけ。未来は自分たちのためだけではない。むしろ、<子供たち、孫たち>、もっと言えば<100年先の未来>のためにある。



こんにちは(*^_^*)
コロナ禍、全国的にも世界的にも大変な1年でした。「はばたき」は入所系の福祉施設という事で、周囲に感染者が出た後でも事業継続は責務です。そういった中で利用者とその家族、スタッフ、関係機関の皆様から出入の業者さんやボランティアの方に至るまで、感染対策等でご協力いただいて、今日まで事業を継続できている事に本当に感謝しております。

10/13 ドライブで食べに行った醤油ソフト



令和2年10月にアルカディアホームページ内ではばたきのブログを開設しました。2ヶ月に1度は新着情報をアップしていきますので、よろしくお願いします。

「はばたき」は、法人内のコロナ対策委員会で検討の結果、昨年2月下旬から他機関等に連絡をとって3月1日からは見学・体験休止とさせていただきます。3月初旬に群馬県で最初の感染が発表されるよりも前の決断でした。コロナウイルスに対する十分な情報のない中での感染対策の初動であり、そういった対応への批判が施設内外に存在している事に気付きつつ、利用者・職員の安全を最優先にという法人の方針に支持されてコロナ対応の初動が始まりました。一スタッフから始まった寮内消毒が、全スタッフに波及していく様、拘禁反応で状態悪化する利用者対応に少しでも生活者として楽しめるような事を提供したいとアイデアを出し、実行していく様、感染予防対策に習熟度を増す利用者、手作りマスクを提供してくれる家族会の役員など、スタッフが総力を尽くすだけではない利用者や周囲の協力があったり成り立っている事を再確認できた1年でした。今年度のはばたきは、警戒度2であった7月～11月下旬までの間に見学・体験ができました。その結果として昨年度より1名多い9名の入所がありました。引き続き警戒度2以下で見学・体験を行っていきます。また警戒度の高い時にも感染予防を行いつつ、生活者としての楽しみがあるサービス提供に努めていきます。

はばたき 廣澤

編集後記

今年に入り、初めてのニュースレターです。この間、発刊が遅れたことを申し訳なくおもっています。コロナワクチン接種は開始されました。①医療従事者など②高齢者（令和3年度中に65歳に達する人）③高齢者以外で基礎疾患がある人、高齢者施設などに従事される人④それ以外の人、という優先順位となっています。

気になるのは、障がい者福祉事業所も利用者及び従事者がどの順位にはいるのか？明らかにされていないことです。全体的な日程も漠然としています。私たち、障がい福祉の利用者、従事者が一刻も早く接種されるように期待するところです。

※今後のニュースレターに関しては、PDF（データ）で皆様の元にお届けさせていただきます。宜しくお願い致します。

編集委員会

群馬県太田市鶴生田町733-123 TEL：0276（20）2509 FAX:0276（20）2510